



第6号
平成21年1月1日発行
発行者
藤香会事務局
092-541-8268
発行責任者
中島 敏行

福岡城築城四〇〇年 記念事業について

藤香会副会長 中島敏行

慶長五年十月、黒田長政公は関ヶ原の戦のあと豊前中津から筑前の地にはいり、翌年福岡城の築城に着手されました。

黒田家譜に、「本城・端城凡七年の内、悉く成就せり」とあるところから、慶長十三年(一六〇八)には本城の福岡城と六端城すべてが完成していたと考えられています。

藤香会では、平成二十年(二〇〇八)を福岡城築城四〇〇年とし、本年度総会で

1. 『藤香会沿革略記』の作成

2. 「記念事業奉賛者名記念碑」の設置の二件を記念事業と決定してまいりましたので、その事業の進捗状況をお知らせします。

現在、1の『沿革』は本年度中の作成の目処がつかしました。しかし、2の「記念碑」の方については、昨今の社会状況のなか、資金調達の問題から本年度中の事業完了は如何なものか、と役員会に諮った結果、今年は一応、中断することとなりましたので、取り急ぎ報告いたします。

長政公三八六回忌ご法要

去年のご法要は祥月命日の八月四日ではなく、七月二十九(日)に行われました。八月二日(三日)に姫路市で黒田サミットが開催されたためです。

去年はお盆前まで記録的といわれた猛暑つづきでしたが、ご法要の当日も油照りの一日でした。崇福寺でのご法要については、前年と同様に福岡市の「市政だより」などでの広報の結果、三四名の会員のほか、一般の参詣者も一九名ありました。

ちなみに長政公のご逝去は元和九年閏八月四日でした。これを「日本暦日便覧」で現在の新暦に直すと九月二十八日になります。

福岡城跡「下の橋大手門」

復元竣工式

平成十二年に不審火のため焼損していた「下の橋大手門」が福岡市教育委員会によって八年ぶりに復元され、その竣工式と見学会が昨年十一月一日に行われました。式典には藤香会にも案内があり九名の役員が出席しました。

式典に続いて「福岡市民の会」企画による(野和太鼓)柳生新影流兵法柳心会の四方払い(御神幸行列)抱え大筒の祝砲なども披露され、数百人の見学者を喜ばせました。

夏の黒田家墓所清掃

二回目・ボランティアを募って

昨年夏の夏の墓所清掃は七月二十六日(土)に実施されました。ボランティアを募っての清掃は、春三月の清掃に続いて二回目でした。

ボランティア呼びかけの目的は、労力はもろろんほしいのですが、もう一つ大切なことは藤香会のことを、もっと多くの人に知ってもらいたいのです。ともに作業で汗を流すことで如水公・長政公に始まる筑前の国二七〇年の領主・黒田家の業績を後世に正しく伝え、福岡の歴史と文化を学ぶ活動の一端にふれていただきたいのです。

作業のあとの集計ではボランティア一〇人、会員四三人計五三人でした。春と夏の作業の違いは暑さのほかに、刈り取った草の分量です。クマゼミの大合唱の中、玉のような汗をかいて、刈り上げた草を軽トラに積み込む青年ボランティアの活躍が印象的でした。

第三回黒田サミット

姫路市で開催

黒田サミットというのは旧筑前藩主黒田家歴代の遍歴の地、現在の五つの市町の行政首脳陣と有志による集いと交流の場です。

黒田家は近江の黒田村(現滋賀県木之本町黒田)に興り、備前福岡(現瀬戸内市長船町福岡)、播磨姫路、豊前中津と、苦難をかさねながら慶長五年、筑前福岡にはいられました。姫路市では毎年、「姫路お城まつり」が盛大におこなわれています。今年の「お城まつり」は八月一日〜三日の三日間で、黒田サミットは八月三日(日)、姫路市民会館で開催されました。

パネリストは木之本町長、瀬戸市教育長、中津市副市長、そしてわが福岡市の吉田市長、当地姫路市長でした。コーディネーターは「播磨の黒田武士顕彰会」会長・中元孝迪氏が務められました。

討議ではサミット五市町が互いに黒田家に関わる歴史を学び、郷土の発展、繁栄に努力していくことで意見が一致しました。

最後は「官兵衛を大河ドラマへ」のサミット宣言で締めくくられました。

今度の黒田サミットには、福岡から一般団体として藤香会と黒田奨学会、福岡城市民の会あわせて三二名の参加がありました。

姫路城下の大手前公園では、サミット五市町の「物産ブース」も設けられ、福岡市からのPRも熱がこもっていました。



◆◆ 御神幸行列の初め ◆◆



姫路お城まつりで歴史パレードの出を待つ福岡の一行

第4回 歴史勉強会

講演 「黒田武士の実像」

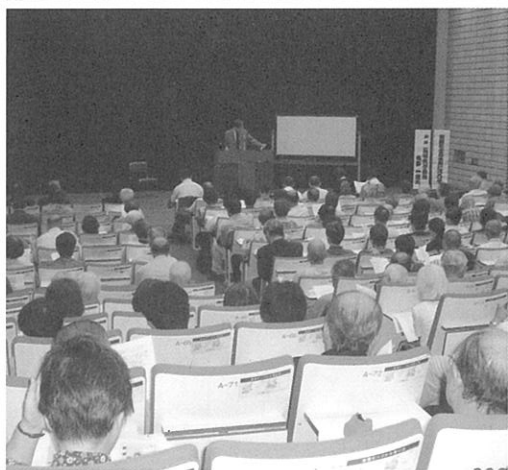
講師・長崎大学教授 柴多一雄先生

この講演会は九月二十日、福岡市博物館企画「黒田長政生誕四四〇年」記念展の一環として催されたものですが、藤香会もこれを年度当初に「勉強会」として年間行事に組み入れていたものです。当会の会員の出席は三八名でした。

〔講演の要旨〕 先生は、「黒田二十四騎」の成立の理由や成立の過程を追うことによつて黒田家中の武士の実像に迫られました。

福岡藩で二十四騎の概念ができたのは、江戸時代中期の、原種次が「黒田二十四騎図」を描いた、元文四年(一七三九)ころのことと考えられます。

では、黒田の二十四人はどのようにして人選されたのでしょうか。まずヒントとなるのは貝原益軒著「黒田家臣伝」と、それに増補した「増益黒田家臣伝」とがあります。このほか、藩政初期の分限帳「慶長七・九年知行書



◆◆ 黒田長政公生誕 440 年記念講演会 ◆◆

黒田長政生誕四四〇年記念展開催

昨年九月十二日から十一月三日までの五三日間にわたる企画展「黒田長政と二十四騎―黒田武士の世界」が福岡市博物館で開催されました。開会式には黒田家第十六代の長高様も臨席され、この企画展をことのほか喜ばれました。

記念展に際しては、展示品を入館者によりやすく解説した「図版目録」が発行され、黒田武士の理解にはもってこいの読み物になっています。

会場には、国宝の太刀、長政公と二十四騎の甲冑や肖像画、書状・文書など約二〇〇点が展示されました。書状・文書類は「お家流」という文字で書かれているため一般には読みづらいのですが、その中の主な文書は「図版目録」のなかで解説されていて歴史愛好家に好評でした。九月二十日には長崎大学の柴多一雄教授による「黒田長政と二十四騎―黒田武士の実像」と題して記念講演があり、多くの歴史ファンが熱心に聞き入りました。

附にある大身・家門・譜代などが、二十四騎選定の大きな基準の根拠になっていると考えられます。

この格付けで二十四騎を数えると、家門三人、大譜代一人、古譜代三人となります。ということとは、二十四騎のすべては、如水公と長政公時代の功臣です。

ところが実は二四家のうち、すでに長政公の時代に三家はなく、その後、忠之公以後、知行没収・追放・改易・立退きなどの理由で、二十四騎図が作成されたころには、僅か六家が残るにすぎませんでした。一方、新しく中・下級武士と新参の要職への取り立てや、禄高増加がありました。

会員クリック⑤

親子二代にわたって

藤香会事務局長 鈴木 裏二



私が藤香会に入会したのは、今からおよそ三〇年前の昭和五十四年のことでした。入会のきっかけは、当時本会の理事であった父から、「お前も会にはいれ」と言われたことと、いま一つは私が以前から歴史に興味をもっていたからでした。

入会後七、八年がたったころ、父は黒田家墓所の南側に繁茂していた竹藪の除去を思い立ち、時には母もつれて、連日のように作業に没頭するようになりました。私も二、三度手伝いをしましたが、竹の根は想像以上に頑強で、あれだけの作業をやり遂げるのは随分骨の折れる仕事だったろうと思います。

それから数年して父は亡くなりましたが、今度は私が、当時の山内勝也副会長から推薦を受けて、父のあとの理事を継ぐことになりました。

理事になると、それまで山内副会長が主導されていた行事の一つ、「史跡めぐり」を私が受け持つことになり、早や一〇年が過ぎました。

また、これは突然のことでしたが、四年前、事務局長であった坂牧氏が退会され、思いもかけず私がその後を継ぐことになりました。私は元来、土木技術者の出で事務的なことは不得手であり、現在まわりの皆さんのご協力で努めを果たしている次第です。

親子二代にわたり、合わせて五〇、六〇年間、会員として、また役員として会のごとに携わっていることになりました。仏教のことばの中に、「縁に応じて錯(あやま)らず、同道唱和、妙玄独脚」とあるように、これも一つの縁として今後とも会の発展のため頑張っていきたいと思っています。

譜代意識が高まってきました。

正徳元年(一七一)に襲封した第五代藩主・宣政公の頃から家臣の資格が重んじられ、家格の固定化が始まります。筋目(黒田家一門)、中老の家格が固定し、「家格」と「職」が連動するしくみができあがっていききました。

「黒田二十四騎図」は黒田武士が規範(理想)として見出した長政公時代を視覚化したものとみることが出来ます。(文責 平田)

編集後記

昨年はじめて熊本城と姫路城を見に行きました。「福岡城跡」があつて、「福岡城」のない福岡市のさびしさを実感しました。(平田)